

凡 例〔本文篇〕

一、『篁物語』で現存するものは、彰考館文庫の椀形本『篁物語』と宮内庁書陵部の『小野篁集』の計二本のみである。本文は彰考館文庫本を底本とし、宮内庁本をもって対校した校本である。

二、本文は底本をできるだけ忠実に翻刻するために、次の諸点に留意した。

(1) 底本の丁数および表裏を「一〇」「一ウ」の符号により明示した。

(2) 仮名づかい・漢字・送り仮名・反復記号など、すべて底本のままであり、句読点・清濁も一切つけなかった。

ただし、仮名の字体はすべて現行のものに改めた。また、漢字の字体も原則として当用漢字に訂正した。改めた漢字は次のものである。

學↓学 顔↓顔 歸↓帰 經↓経 國↓国 神↓神 内↓内 納↓納 夢↓夢 瀬↓瀬 涙↓涙

(3) 底本および対校本で意味の通じない箇所、または不自然の所は、該当箇所に\*印を附してこれを訂し、頭注にてそれを明記した。

(例) 「いりたる」ハ「いひたる」カ

三、対校の記号としては黒点と括弧とを用いた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧をもって囲んだ部分は宮内庁本で、黒点はそれに相当することばを欠いている事を意味する。

例えば「物語……<sup>(ものかたり)</sup>」などもして文・<sup>(ふみ)</sup>のてと」

とあるのは、彰考館本では「物語などとして文のてと」とあるが、宮内庁本では「ものかたりなどとしてふみのちり」とあるという意味である。

四、校異の結果、底本の本文より対校本の本文が正しいと考えられる場合は、対校本の括弧の上に○印を附して校者の私案を示した。

五、本文上部に附したアラビア数字は本文の行数を示し、下部に付したアラビア数字は、日本古典文学大系本の頁を示す。これは索引の便のためである。

本篇

「けり」ハ「ける」カ

- 1 おやのいとよしかしつきける人のむすめありけり女のするさえのかき  
 2 りしつくしていまはふみよませんとてはかせにはむつまじしからん人をせん  
 3 とてことはらのこの・(手)かみたいかく(ふ)のしうにてありけりことはらなりければうとくてあひ  
 4 みすなとありけれとしらぬ人よりはとてすたれこしに几帳たてゝそ  
 5 よませけるこのおとこいとおかしきさまをみてすこしなれゆくまゝにかほを  
 6 みえ物語・(もの)のかり(お)などもして文・(ふみ)のてといふものをとらせたりけるをみればかくひ  
 7 ちして一首をなんかきたりける  
 8 なかにゆくよしのゝ河はあせなゝんいもせの山をこゑてみるへく(お)  
 9 とありければかゝりけるとこゝろつかいしけれとなきけなくやはとて  
 10 いもせ山かけたにみえてやみぬへくよしのゝ河・(し)野のかは(い)はにこれとそおもふ  
 11 又・(又)またおとこ

12 にこるせはしはしはかりそみつしあらはすみなむとこそたのみわたらめ  
13 (女・) をんな  
「二オ

14 ふちせをはいかにしりてかわたらむところをさきに人のいふらん

15 おとこ

16 (身) みのならむふちせもしらすいもせかはおりたちぬへきこちのみして  
「二ウ

17 かくいふ程に人にくからぬよなれはいとけうとくなかりけり

18 しはすのもちころ月いとあかきに物語・・しけるを人みてたれそあな  
(かたり)

19 すさまししはすの月夜ともあるかな・といひければ  
(ん)

20 春をまつ冬のかきりとおもふにはかの月しもそあはれなりける  
(霜・)

「三オ

21 (返) かへし

22 としをへておもふもあかしこの月はみそかのひとやあはれとおもはむ  
(入・)

23 かくいふほとに夜ふけにければ人うたてみんなものとしていりにけりおとこ  
(程・) (吾物・) (入・)

24 はさうしにとみにもいらてうそふきありきけり

25 さてあしたにひさしくふみよませさりければちゝぬしあやしくたかむらかみえぬ  
(う) (う) 「二ウ

26 かなといひてよひにやるにおとこきてれいのふみかきあつめてをしへけるまゝ  
(お) (お)

27 になんこの女のみこゝろにいりてひかことをのみなむしけるかうをしふる中  
(む) (心・) (入・) (事・) (お) (お) (の物) (本まゝ)

28 にかくひちしてかやう・初のふみは、ひかことつかうまつらんこのこ  
(う) (の物) (本まゝ)

29 ろは物・おほえすそや  
(もの) (へ) (へ) (へ)

「四オ

30 きみ(君)をのみおもふ(心・心)ころはわすられす契(ちぎり)・しこともまといふ(心・心)ころか

31 かへし

32 はかせとはいかゝたのまむ(き)ひとしれすものわすれする人のころを

33 又おとこ

「四々」

34 よみきゝてよろつ(い)のふみはわするとも君・ひとりをはおもひもたらん(きみ)

35 かくてこのおとこはてふくみをそつねにつくりかへける(返)

36 さてこの女願ありてきさらきのはつむまいなり(お)にまいりけりとも人おほくも

37 あらておとな二人わらは二人そありけるおとなはいろ(色々)のうきふたりはおな

38 しいろをなんきたりける君はあやのかいねりのひとへかさねからのうすものゝさくら(お)

39 いろのほそなかきてはなそめのあやのほそなかをりてそきたりけるかみはうるはしくて(色)

40 たけに一尺はかりあまりてかしらつきいときよけにてかほもあやしくよ人にはにす(なり)

41 めてたぐなんありけるをのわらは三四人さてはこのせうとそありけるまほ(おほ)に

42 はあらねとききたちをくれてきけるまうてさまにこうしにければせうといとおかし(おかし)

43 かりてたかむらにかゝり給へとてよりければいていな(い)といひて道

44 中にいにけりさる程に兵衛すけはかりの人かたちきよけにてとし廿はかりなり(佐)

45 けるかまうてあひてかへさに女のみちにゐるあなくるしかくてやは(六)

46 あてたち給へるものねたましとおと申にかしは車つくりて(の)せたてまつりてこのわたりな(物)

47 る木さきの屏・にすへたてまつらん女(女)の身には大王・みかとはたれをかをと(と)といふ(き)

「六ウ」

48 ほとにくれぬ・れはわりこさかしてくはせんとするにこのすけをやりすくすこ

49 のおとこやすむやうにておりて

50 人しれぬこゝろたゝすの神ならはおもふこゝろをそらにしらん

51 かへし

52 やしろにもあたぎねすぬ石神・・はしるることかたし人のこゝろを

53 またもおこせけれとこのせうといそかしてくるまにのせてあていぬこのすけ

54 人をつけていつくにかあていぬるとみせければそのいゑとみてけり

55 あしたにふみあり神のをしへ給・・しかはなむさしてたてまつるかの石神・・の御もとに

56 てけふあらはふみをとりにれてみればこのせうといはしりてちゝぬし・きゝ

57 給・・にいとものさはかしうこのわらはゝいつくからきたるにいつれのすきものゝ

58 つかひそといひければ御ふみはたてまつらせつれときふいませしぬしのいつれ

59 のつかひそとの給をうちからはおきなひたるこゑにてなにごとそなとの給つれ

60 はわつらはしさになむまうてきぬるといひければとうめのわらはやといひ

61 てまたのあしたに昨日の御返・・たひくゝいとおほつかなしこのわらはの

62 あとはかなくてま・てきにしかは

63 あとはかもなくやありにしはまちとりおほつかなみにさくところか

64 このせうと大・かくにいてにけりひすましわらはとりいれてたてまつるふみをもとり大・かくの

65 ぬしもふみつくるちかゝらん人のいゑにすゑよとて昨日もみしかともい

「いりたる」ハ「いひたる」カ

「まならひ」ハ「まなこひ」カ

「とりて」ハ「とひて」カ

「みちあひ」ハ「みちかひ」カ

66 さや  
「九才」

67 たまほこのみちかひなりし君なればあとはかなくなるとしらすや  
(玉・錦・)

68 みてされたるへき人かなうたてまかしくもいりたるかないかに

69 いはましとおもふ時・大納言の子なりけりあとはかまなしとたれもみちに  
(の)

70 こそめ・給へりしか  
(いりたま)

71 しはくにあとはかなしといふこともおなしみちにはまたもあひなん  
(事・) (道・) (又・)  
「九才」

72 またこれわいのわらはもてきたりせうとみちにさしあひていまこれよりと

73 いひてやりてけりかくなといへはれいのこころきもなきわらはかなさきに  
(ん) (心・)

74 けしきあしういひけむ人にやとらすへきこのいなりにてまならひものし  
(ん) (物・)  
「一〇才」

75 けにおもへりしものそやおとこよりのものそやそもく御返とりてやりつ  
(思・) (物・) (返・)

76 御かへりにくしとおもふものゝやうにせうといてあひて御ふみたてまつり給人は夜  
(返・) (物・) (の)

77 へおとこにぬすまれたまひ・しかはもとめにゆくをもしこの御ふみ給へる人とし  
(そ) (口) (た) (ま)

78 らすう・ちいていけといひければしりへこたゑにこたへてはしりにけりさも  
(そ) (口) (ち) (た) (へ) (た) (ま)  
「一〇才」

79 あらんとおもひてふみもやらすなりにけり女せうとはかりたるとはしらて  
(む) (い) (ん) (お)

80 あやしうをとつれぬと思・をりこのせうとれいのことあるなりみちあひ・の  
(ふ) (お) (道・) (人)

81 しりもしらぬ人にふみかよはしけさうし給人の御こころ・こそありけれかのひとは  
(心) (心) (人) (た) (ま)  
「一〇才」

82 御めにやかてあはせたてまつらんかうとこそよからめゆるされたまはてはふよう  
(る) (心) (た) (ま) (あ)

83 そなといひければなてうめにかつかんいかにしりてかともかうも  
(あ) (ふ) (あ)

「ちかさらん」「ハ」「つかさらん」カ  
「しひも」「ハ」「しひて」カ

「し」「ハ」「いひ」カ

「おもひくさな」「ハ」「おもひくまな」カ

84 おもはん<sup>(世)</sup>よをしらさらん人はさやうにもいはてこそあらめ<sup>(見)</sup>みつかすの御

85 ありさまや<sup>(心・)</sup>こゝろうしとおもはすなりなといへはいもう<sup>(心・)</sup>といとおしうてなにか  
「一二ウ」

86 めにちかさらん人<sup>(口)</sup>を<sup>(みたま)</sup>見給・へとおもはん<sup>(む)</sup>とていりにけり

87 れいのふみよみに<sup>(てないし)</sup>内侍・になさんのこゝろありておやはふみを<sup>(ふ)</sup>・しふるなりけりふみか

88 よはしに<sup>(ふ)</sup>はし<sup>(ふ)</sup>たれとこのせうと心をまとはしておもひいてられけりおとこい  
「一二オ」

89 ふやうかくおもひいてられかきりなきこゝろを思<sup>(心・)</sup>・しらすしてよそなる人をおも

90 ひたまへるこそつられ

91 めにちかく<sup>(見)</sup>みる<sup>(ひ)</sup>かいもなくおもふともこゝろをほかにやはつらしな

92 といひければ人の御<sup>(心・)</sup>こゝろも<sup>(ふ)</sup>・しらすや  
「一二ウ」

93 あはれとは君はかりをそおもふらん<sup>(む)</sup>やるかたもなきこゝろとをしれ

94 おもひくさなやといひければすこし<sup>(心・)</sup>こゝろゆきて  
「一二オ」

95 いと<sup>(ふ)</sup>しく君かなけきのこかる<sup>(あ)</sup>れはやらぬおもひもえまさりけり

96 かくいひてこゝろはかよひけれとおやにもつゝ<sup>(心・)</sup>み人にもさはりければこゝろとけ  
「一二オ」

97 てひさしくもかたはすありされといかてかいりけむこのいもうとのねたるとこゝろ<sup>(所・)</sup>

98 へいりにけりいとしのひてまた夜ふかくいてにけりたまさか<sup>(いり)</sup>にはい

99 は<sup>(入・)</sup>入<sup>(心・)</sup>りたりけれとあふことはかたかりけりつねにむかひ<sup>(に・)</sup>あたりければよるは

100 あはす中<sup>(心・)</sup>に心はそらにていかにせんとおもひ<sup>(思・)</sup>なけきて  
「一二ウ」





「いたりた」ハ「たはかる」カ

「てか」ハ「ハ」テ「カ」

「の」「ハ」「カ」

- 118 こもりゐてなきけりいもうとのこもりたる所にいきてみればかへのあな・いさゝか  
「一六オ」  
119 ありけるをくしりてこゝもとにより給へとよひよせて物かたりしてな  
「一六オ」  
120 きおりていてなまほしくおもへと・またいとわかくていたりたへき人もなく  
「一六オ」  
121 わひければともかくもえせていといみしくおもひてかたらひをるほとに夜あ  
「一六ウ」  
122 けぬへしおとこ  
123 かすならはかゝらましやは世の中にいとかなしきはしつのおたまき  
「一六ウ」  
124 かへし  
125 いさゝめにつけしおもひの煙・こそみをうき雲となりてはてけれ  
「一七オ」  
126 といひてなきあへりけりよあけにければさうしにかへりてこの女・くひつ・  
「一七オ」  
127 きや・にものせてかへてもてゆかんとするにこゝろまとひ・てあしもえふみたて  
「一七オ」  
128 すものおほえさりければむつまじくつかふさうしきをつかひにてたゝいま心あし  
「一七ウ」  
129 くてえまいりこすそのほとこれすぎ給へためらひてまいらむ女あなのもと  
「一七ウ」  
130 にてまつにかくいひたれば  
「一七ウ」  
131 たかためとおもふいのちのあらはこそけぬへき身をおしみるとめ  
「一七ウ」  
132 とりいれすかへりてかくなむといひければかしこくしてまたくいき  
「一七ウ」  
133 てみれば三四日ものもくはても・おもひければいとくちおしくいきもせず  
「一八オ」  
134 いかゝおはしますといひければ  
「一八オ」  
135 きえはてゝ身こそはいいになりはてめ夢・のたましゐきみにあひそへ  
「一八ウ」  
136 かへし  
「一八ウ」

137 たましゐは身をもかすめすほのかにて君ましりなはなにゝかはせん  
「玉」 「一八ウ」

138 とてよろつこと(事)をいひてなけと・いらへせすなりにければしぬとてなき

139 さはけはこゑをきゝてときあけてみればたへいるけしきをみてまどゐ・てゝ  
「家」 「ひい」

140 ほかのいゑにゐにけりおやいてゝのちにゐていていりてみればしにてふせ  
「よ」 「い」 「あ」

141 りなきまどへとかひなしその日のようさりひをほのかにかきあけてな  
「火」 「九オ」

142 きふせりあのかたそゝめきけりひをけちてみればそひふす心ちしけ  
「火」 「地」

143 りしにしいもうとのこゑにてよろつのかなしきこと(事)をいひてなくこゑもいふ・ともた  
「事」 「〇三」

144 ゝそれなりければもろともにかたらひてなく／＼さくれはてにもさはらす  
「い」 「身」

145 てにたにあたらすふところにかきいれてわかみのならんやうもしすふさ  
「入」 「我」 「身」 「九ウ」

146 まほしきこと(事)かきりなし

「あはの山かへる」ハ「わかれにあはにむすへる」カ  
147 なきなかつ涙のうゑ(上)にありしにもさらぬあはの山(ぬう)かへる 本まゝ

148 女(返)かへし

149 つねによるしはしはかりはあはなれはついにとけなんことそかなしき  
「二〇オ」

150 といふ程・に夜(ほと)のあけにければなしおやはすてゝいにければとかくおさむ  
「ほと」 「あ」

151 ることはたゝこのせうとそしける人はみなすてゆき(い)にければたゝこ  
「い」 「行」

152 のせうとす・さ三四人かくさう一人してこの女を(い)にけるやをいとよくはらひて  
「い」 「二〇ウ」

153 はなかうたきてとをき所に火をともしてゐたればこのたましゐなんよなく／＼きて  
「二〇ウ」

「を」ハ「の」カ

154 かたらひける三七日はいとあさやかなり四七日はときくみえけりこ

155 のおとこ涙・・つきせすなくその涙をすゝりのみつにて法華經をかきてひえの三昧堂

156 にて七日のわかしけりその人七日はなしはてゝもほのめくことたえさ

157 りけり三年すきてはゆめにもたしかに・みえさりけりなをかなしかりければ  
「二一オ」

158 はしめのこととしてなんまかせたりけるめにもよらてひとりなんありける

159 時の右大臣のむすめたまへとふみをおもしろくつくりてうちにまいり給・・とて御車

160 よりとり・たまふ・とについふるまいてたてまつれたふにとりてみたまひうけ  
「二一ウ」

161 給・はりぬ今・家にまかりて御返きこえんとの給大学・・にいりにけりとのに

162 かへり・て御むすめ三人おはしけり大君にしかくのことなんあるいかに

163 ときこえ給へはゑしてなきていり給ぬ中・君おなしこときこえ給・・三・君にきこや

164 たまふともかくもおほせことにこそしたかはめとの給へはいときよけにしむ  
「二三オ」

165 殿・つくりてよき日してよひ給・・御せうそくありければいとかなしうつるはみの・・やれこう

166 したるきてしりゐたるくつはきてふくめる文・のちゝとりてきにけりちやう  
「本ま」

167 のうちにいりてまつこの文・まきをたてまつればとり給・はねはたかむらさしいけは  
「二三ウ」

168 この君かはのおひをとりてひきとめ給・へはとまりたまひにけりこれをかいま

169 みてちゝおとゝみたまひていとかしこくしつとよろこひたまふいてゝい

170 なまししいかに人きゝやさしからましいとかしこきことなりとよろこひた

「かくして」「ハ」「かくさて」「カ  
「さらすは」「ハ」「さこそは」「カ

171 まふ・に

172 三日の夜いといかめしう・てまぢ給・・たゝわらはひとりそくし給・・けるさて  
「二三オ

173 このころいもうとのありしやにいきたりければいとかなしかりければねにけり  
「二三オ

174 いもうと

175 見し人にそれかあらぬかおほつかなものわすれせしとおもひしものを  
「二三オ

176 といひければかのとのにもいかにてそなきをりけるひさしうこねは大臣殿  
「二三オ

177 あやしとおほしたりけり七日はかりありてきたりなとかみえ給・・さりけ  
「二三オ

178 るとのたまへはすなをなりける人にてことかくしていひければめい

179 とあるへかしきことにてあはれのことやわかためにもさらすはおはせめ

180 わいてもこそはむかし人はこゝろもかたちもさもののし給ければこそしをへ  
「二四オ

181 てえわすれかたくし給・・らめさる人を見たまひけんにいひしらてみえたとまつるよ  
「二四オ

182 後・・世いかならん  
「二四オ

183 あかすしてすきける人のたましゐにいけるこゝろをみせたまふらん  
「二四オ

184 あなはつかしとの給におとこなにかそれはおほしめすかくては  
「二四オ

185 えしろしめさし御たましゐのあるやうもみるへくこゝろみにさへなり給・・はぬ  
「二四オ

186 とて

187 わかれなはをのかさまくなりぬともおとろかさねはあらしと思・・はぬ  
「二四オ

188 いてゝまかりしをひきとゝめてけふまでさふらはせ<sup>(給・ん)</sup>たまふうるさしか

189 しいひける

190 このおとこはわかきあひたはいとねんころにあはてほかに夜かれなもしけり<sup>(みえ)</sup>

191 なりいてゝ宰相<sup>(さいさう)</sup>・よりもかみになりけりこれなん<sup>(むな)</sup>名にたつたかむらなりけるさい

192 かくはさうにもいはす山<sup>(さん)</sup>たつ・ることもえたりかは<sup>(くわ)</sup>・この国<sup>(の)</sup>・人<sup>(の)</sup>にはたらずそあり<sup>(有・ん)</sup>

「二五ウ

「たらずそあり」ハ「たえてなかり」カ

「んまうのゝこて」ハ「むまことゝて」カ

193 けるこのこんまうのゝこてかくうたよまぬはなかりけりきゝたまはさりし<sup>(むこ)</sup>

194 あねふたところはいとわるき人のめにてこの御とくを見給<sup>(みたまひ)</sup>・けるいとよくなりあてけ<sup>(い)</sup>

195 れはこの三<sup>(の)</sup>・君<sup>(きみ)</sup>をまたふたつなくもてかしつぎたてまつるいまの人まさに大<sup>(かく)</sup>学<sup>(く)</sup>・のせ

196 うをむこにとる大しもあらむやたゝころかたちさいおとり給<sup>(たまふ)</sup>・なるへし

「二六ウ

197 又<sup>(また)</sup>・あらしかしかやうにおもひて文<sup>(ふみ)</sup>・つくる人<sup>(ひと)</sup>・は